

飛島学園

愛知県 飛島村立飛島小学校・飛島中学校



校舎北側外観

背景

飛島村は、名古屋市の西隣に位置する人口約4,500人の村であり、飛島学園はその村唯一の小・中学校である。平成14年に飛島村が『東海地震に係る地震防災対策強化地域』に指定され、耐力度調査の結果、小学校校舎は早急な改築補強対策が必要とされた。その一方で村唯一の学校に対する地域の期待も大きく、平成15年に学校施設等検討委員会、平成16年に小中一貫教育研究会・教育特区研究会を設置し、村の1小・1中を統合した小中一貫教育校「飛島学園」の検討が始まった。計画の検討は、地域住民、教職員代表者、行政関係者、学識経験者、設計者等によるワークショップを行いながら進められ、地域の熱い思いが込められた飛島村ならではの学校が平成22年4月に開校した。

施設一体型事例

施設分離型事例

事例間比較

	学 年								
	1	2	3	4	5	6	7	8	9
学年段階の区切り	初等部			中等部			高等部		
授業方法	学級担任制			教科担任制					
運営方式	特別教室型								
授業時間	45分			50分					
校長	小学校長1人			中学校長1人					
副校長・教頭	小学校教頭1人			中学校教頭1人					
部活動	なし			週1~2回参加			部活動		
PTA	小・中のPTA組織を残しつつ、新たに「飛島学園PTA」を組織								
ゾーニング	1階			2階					
校長室	1階			1階					
職員室	1階								
保健室	1階			2階					
特別支援学級	1階			2階					
音楽室	2階(第2音楽室)			2階(第1音楽室)					
家庭科室	なし			2階					
図書室	1・2階(吹抜と階段を通して一体型)								
ランチルーム	1階(400席)								
昇降口	1階			1階					
体育館	2階								
グラウンド	プレイヤード			グラウンド					
プール	なし(村民プール利用)								
給食室	1階(単独校方式)								

学校概要

学校規模	[小]普通:10学級(260人) 特別支援:2学級(2人) [中]普通:5学級(114人) 特別支援:1学級(1人)
学年段階の区切り	4-3-2
開校年	平成22年(2010年)
構造	鉄筋コンクリート造 一部鉄骨造 一部鉄骨鉄筋コンクリート造
階数	地上2階
校地面積	26,685㎡
延床面積	7,074㎡

教育上の特色

9年間で4-3-2に区分し、初等部を「基礎・基本期」、中等部を「充実期」、高等部を「発展期」と位置づけ系統的・計画的な教育活動を実施している。平成20年度より教育特例校指定を受け、英語教育に力を入れており、小学校全学年において「英語科」を実施(年間17~35時間)。初等部の区切りとなる小学4年では1/2成人式を行い、地域の人も交えて児童の成長を祝っている。

学校運営(マネジメント体制)

小中それぞれに校長がいるが、施設管理等の責任者として学園長が決まっている。乗り入れ授業を行う教諭・養護教諭に対しては兼務発令がされている。また、教務、生徒指導、学校事務等は共同で実施している。

計画・設計上のポイント

- 1.異学年交流スペースの充実
- 2.小中一貫教育の実施に適した安全性の確保
- 3.学年段階の区切りに対応した空間構成、施設機能
- 4.小中一貫教育の取組の高度化に資する共同利用

施設上の特色

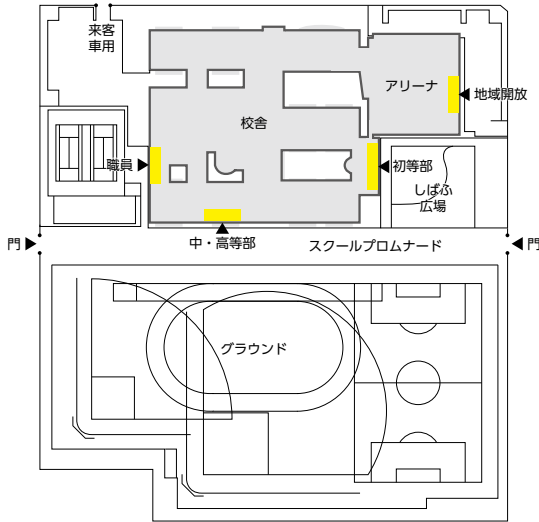
【全体の構成】 校舎は「メディアセンター」「ふれあいホール」を中心に、普通教室ユニットや特別教室ゾーンを配置している。各ユニットやゾーンの間には、屋外テラスやなかよし広場等、多くの屋外空間が取り込まれ、異学年交流を促すとともに、多彩な学習環境を提供している。

【教育活動の一貫性確保】 普通教室は4-3-2の学年段階にあわせた配置になっており、1階の1~4年(初等部)は2学年ごと、2階の5~9年(中・高等部)は1学年ごとのまとまりでオープンスペースとあわせてユニット化されている。

【運営の一貫性確保】 小中一体の職員室は校庭やスクールプロムナードが見渡せる校舎南側にまとめられている。

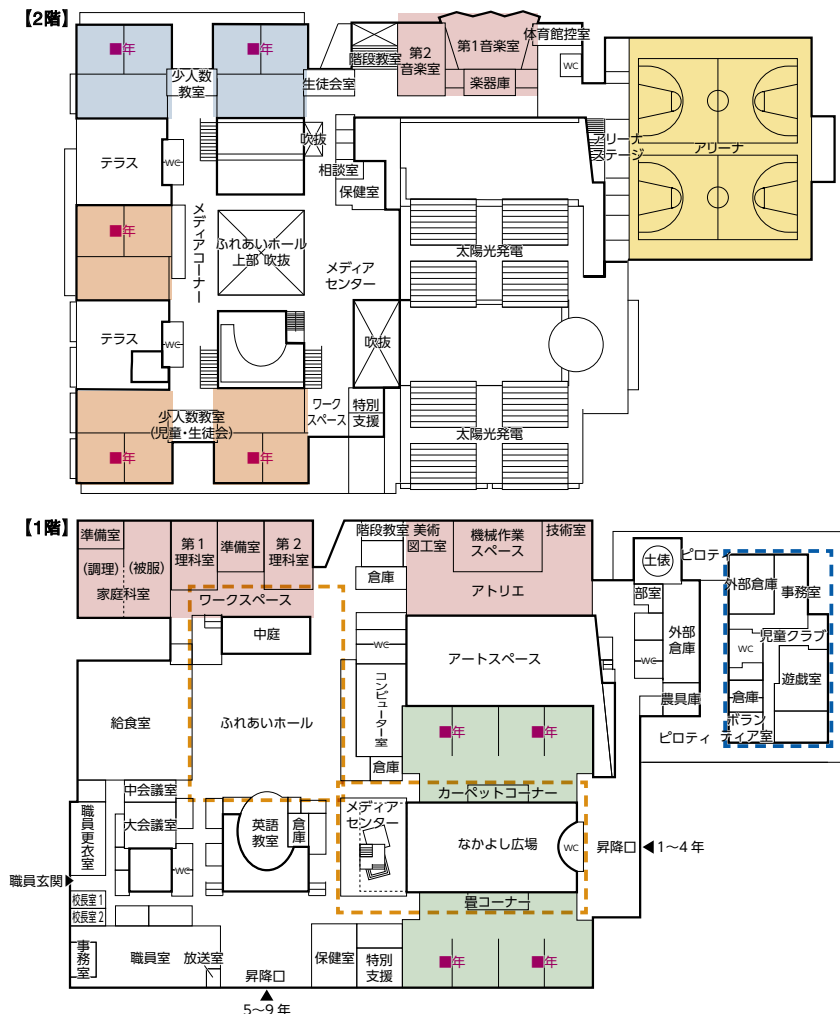
【地域とともに】 飛鳥学園は村の中心エリアに立地し、村の社会教育、学校教育を包括する生涯学習拠点の役割を期待されている。施設の相互利用も可能であり、プールの授業では隣接の村民プールを利用している。

配置図



校地		新しい敷地	
面積	グラウンド	28,172m ²	
		小 17,542m ²	中 10,630m ²
校舎		9,806m ²	
		小 6,155m ²	中 3,651m ²
体育館		1,447m ²	
		小 901m ²	中 546m ²

平面図



施設一体型事例

施設分離型事例

事例間比較

1. 異学年交流スペースの充実

メディアセンター



子供たちが利用しやすいように、メディアセンター(①)は校舎の中心に位置している。1・2階をオープンな階段と吹き抜けとすることで、一体感を持たせており、「飛鳥学園」を象徴する空間である。メディアセンターの周りのブースは、グループでの話し合いや学習の成果を展示するスペースとしても使うことができる。

その他、ふれあいホールや階段教室などの発表の場も隣接しており、メディアセンターでの学習の幅が広がる。(②：階段下のお話しコーナー、③：吹抜に面して本棚と閲覧テーブルがならぶ、④：メディアセンターで初等部・中等部・高等部の交流が生まれる)

ふれあいホール



400人が収容でき、全学年の児童生徒と先生が一堂に会して給食を食べることができる。隣の給食室でつくられた給食を調理員からカウンター越しに直接受け取るカフェテリア方式を採用している。

ランチルームとしての利用の他、集会の場として、またプロジェクターを使つての発表や上映会にも利用できる。英語教室の一部がふれあいホールの舞台にもなる。

(⑤：給食時の様子)

2. 中高一貫教育の実施に適した安全性の確保

屋外環境



各教室は中庭やテラスに面しており、上靴のまま外に出ることができる。学年段階に応じて様々な広場が配置されており、1階の初等部ユニット近くには遊び場である「しばぶ広場」(⑥)や中庭の「なかよし広場」(⑦)が設けられている。2階の中・高等部ユニットには教室の間にベンチ等のある広いテラス(⑧)が設置されており、児童生徒が年齢に応じて安心安全に過ごすことができる計画となっている。

3. 学年段階の区切りに対応した空間構成、施設機能

■ 学年ユニット



2階の5～9年生の教室(9)は、学年のまとまりを重視した「学年ユニット」とし、異学年が通り抜ける動線とならないように配置。掲示板として使える移動式の間仕切りにより、様々な学習形態に対応できる。

1～4年生の教室(10)は異学年の交流を重視して2学年ごとのまとまりとしている。床座する事が多い初等部のワークスペースには「畳コーナー(11)」や「カーペットコーナー」を備えている。

どの空間にも十分な余裕があり、階段や廊下の幅は広く、要所に溜まり(12)を配しながら、建物全体をゆったりと回遊する。

4. 小中一貫教育の取組の高度化に資する共同利用

■ 理科室



講義・実験両方に対応した第1理科室(13)と実験中心の第2理科室(14)がある。第1理科室は主に1～6年、第2理科室は主に7～9年が利用している。

準備室の前にあるワークスペースは、理科に関する展示や本、プリントなどを置いて教科スペースとして使うことができる。

■ 家庭科室



調理(15)と被服(16)のエリアに分かれており、同時に授業を行うことができる。調理台で作った料理を、食卓としても利用できる被服台で食べたり、テラスやふれあいホールで食べることもできる。

施設一体型事例

施設分離型事例

事例間比較

▶ 校長の視点から

かたやま こうき
飛鳥学園 校長 片山 幸毅

本学園は施設一体型の小中一貫教育校である。ランチルームの機能を備えた「ふれあいホール」は、全学年で給食を食べられるだけでなく、集会・異学年交流を図ることができるよう設計されている。「メディアセンター(図書館)」は、調べ学習に対応できる開放的な施設である。各教室もオープンで、ワークスペース(廊下)は教室と同じ広さのスペースを確保し、特別教室に代わる機能や学年間交流のためにも活用している。

大原学院

京都府 京都市立大原小学校・大原中学校



高解像度を
お願い致します

校舎外観



校門

背景

大原学院の校区は京都市の中心部から北東へ15km、特別風致地区・歴史的風土保存地区・市街化調整区域になっていることもあり、児童生徒数は年々減少し、今後も増える見込みがなかった。平成16年に少子化問題対策委員会が設置され、学校の存続をめぐる地域全体で協議した。少人数での教育に対する不安から近隣の学校と統合する案もでたが、「地域には学校が必要」という思いも強く、最終的に小中一貫教育実施校として、小中とも地域に存続することとなった。

平成19年に学校関係者、PTA、地域住民等からなる「学校運営委員会」を発足し、小中一貫教育についての検討を進め、平成21年4月に開校した。

	学 年								
	1	2	3	4	5	6	7	8	9
学年段階の区切り	前期			中期			後期		
授業方法	学級担任制			教科担任制			教科担任制		
運営方式	特別教室型								
授業時間	45分			50分					
校長	学校長1人								
副校長・教頭	小学校教頭1人			中学校教頭1人					
部活動	なし			部活動					
PTA	PTA組織を一本化								
ゾーニング	1階	本館2階		東館2階			本館2階		
校長室	本館1階								
職員室	本館1階(学年段階の区切りごとの座席配置)								
保健室	本館1階			東館1階			本館1階		
特別支援学級	本館1階			東館2階					
音楽室	西館1階								
家庭科室	なし			東館1階					
図書室	本館2階			西館1階			本館2階		
ランチルーム	西館1階 定員約30名								
昇降口	1階								
体育館	講堂 本館1階・体育館 西館2階								
グラウンド	グラウンド			サブグラウンド					
プール	1階 水深の調整(すのこで調整)								
給食室	1階(単独校方式)								

学校概要

学校規模	[小]普通 通:6学級(47人) 特別支援:1学級(1人)
	[中]普通 通:3学級(30人) 特別支援:1学級(1人)
学年段階の区切り	4-3-2
開校年	平成21年(2009年)
構造	鉄筋コンクリート造
階数	地上2階
校地面積	12,124㎡
延床面積	5,433㎡

教育上の特色

この学校の目指す子供像は「思いやりを持ち、自ら汗のかける子」「科学的思考ができる子」「コミュニケーションが発揮できる子」である。少人数の中で育った子供たちにとっては、コミュニケーション力が課題となる。そこで他校や留学生、観光客との交流や、多人数を前にした発表等、様々な人とふれあう機会を可能な限り多く持たせるようにしている。

総合的な学習の時間には「大人になる科」として自分の考えを地域に発信したり、自然と勤労の大切さを学ぶ栽培活動を行ったりしている。また、英語学習を1年生から取り入れている。

学校運営(マネジメント体制)

1人の校長が小・中学校を兼務しており、さらに全職員に対し、兼務発令されている。教務・教科・生徒指導関係や学校事務は、小・中学校が合同で実施している。

計画・設計上のポイント

1. 学校運営の一貫性確保への対応
2. 既存学校施設の有効活用
3. 地域とともにある学校施設の整備
4. 異学年交流スペースの充実

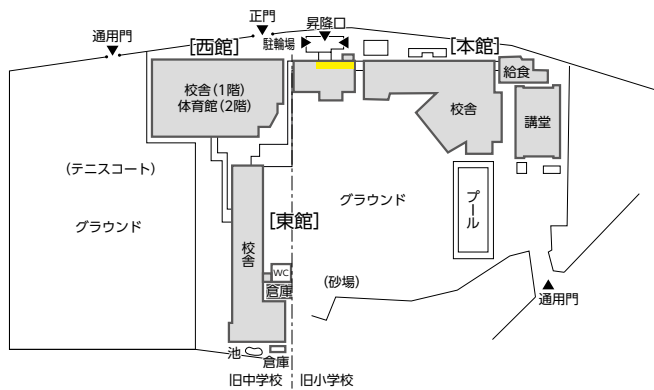
施設上の特色

【全体の構成】 小中一貫教育の実施に向けて、隣接する小中学校の既存校舎に対し、小中合同の昇降口、小中の校舎間をつなぐ渡り廊下、小中一体の職員室、子育て支援センターの整備を行い、その他は既存校舎を最大限活用して運用している。校舎は旧中学校校舎の西館、東館、旧小学校校舎の本館の3棟で構成されており、東館を挟むように小中それぞれのグラウンドがある。

【教育活動の一貫性確保】 普通教室は、4-3-2の学年段階の区切りに合わせて、旧小学校校舎に1~4年と8~9年、旧中学校校舎に5~7年を配置している。特別教室は旧小学校、旧中学校のものをそれぞれ利用するため、動線が交わり、自然な異学年交流を促している。

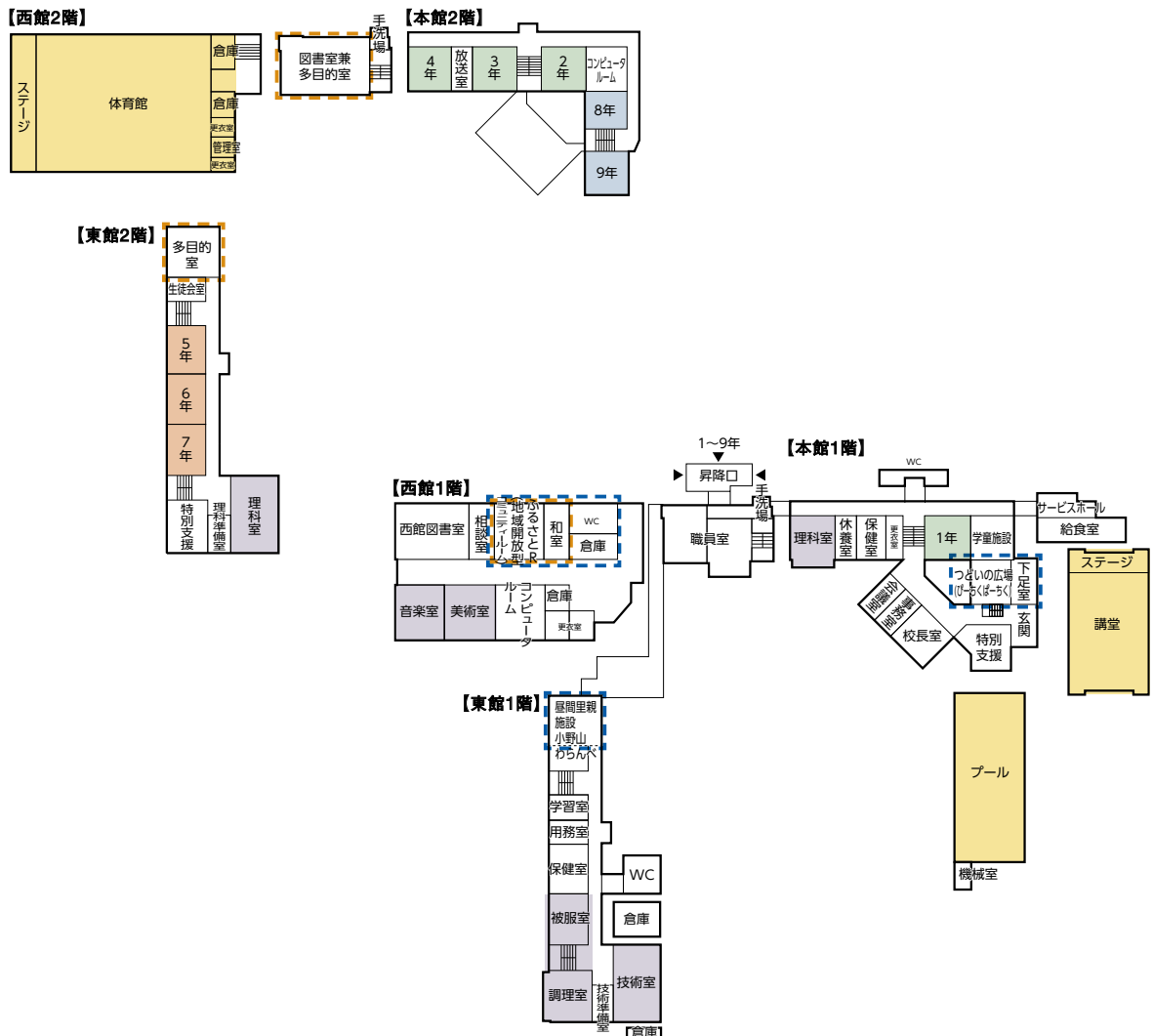
【地域とともに】 施設内で保育施設（わらんべ）や子育て支援センター（ぴーちくぱーちく）、学童クラブ等の運営も行う地域の教育センターである。

配置図



校地		従来からの小中隣接敷地				
面積	グラウンド	6,686m ²				
	校舎	小	3,325m ²	中	3,361m ²	
		4,275m ²		小	2,110m ²	中
体育館	1,158m ²		小	330m ²	中	828m ²

平面図



ご確認をお願い致します
S=1/4000

ご確認をお願い致します
S=1/1100

【凡例】

- 前期
- 中期
- 後期
- 特別教室
- 運動施設
- 異学年交流ゾーン
- 地域交流ゾーン

施設一体型事例

施設分離型事例

事例間比較

1. 学校運営の一貫性確保への対応

■ 小中一体の職員室

一貫教育校での小中教員の密接な連携を重要視し、小中一体の職員室(①)を改修整備した。

開設当初の座席配置は分掌ごとの配置としていたが、現在は、より情報が伝わりやすいように学年段階ブロックごとの配置としている。

教務主任(小)	1年	3年	3・4年	5年	6年	7年	給食調理人	SC
教頭(小)	2年	4年	4年	5年	6年	7年	図書館支援員	ALT
教頭(中)	9年	9年	養護教諭	他校兼務教員(中)	非常勤(中)	非常勤(中)	非常勤(小中)	プリンター
校長(中)	8年	8年	8年	事務職員(中)	事務職員(小)	管理用務(小)	管理用務(小)	プリンター

平成26年度 職員室座席配置



2. 既存学校施設の有効活用

■ 既存校舎の活用

小中一貫校として開校するに当たっては、玄関、渡り廊下を増築し、職員室は既存の小学校家庭科室を改修し設けた。必要最低限の整備で既存校舎を最大限活用している。

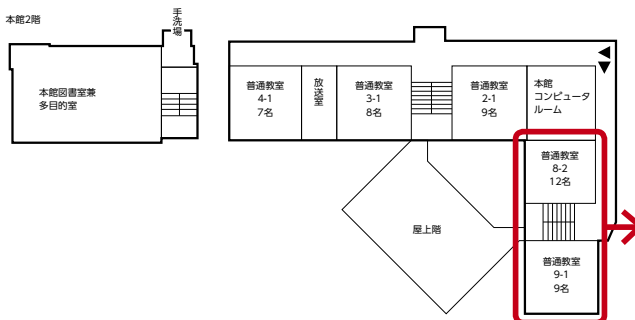
■ 既存校舎活用のための工夫

職員室を一体化している一方で、既存校舎を活用した校舎であるため動線が複雑であったり、職員室と各学年の普通教室が離れているなどの制約があるが、施設整備や運営上ではきめ細やかな工夫をしている。

プール利用時には「すのこ」を利用して水位調整を行い、手洗い場では身体寸法に応じた使用ができるよう「踏み台」を設置するなどの配慮をしている。また、体育館内には高さの異なる2種類のバスケットゴールを設置し、低学年児童が高位置へゴールすると得点が高くなるといったルールを設けるなど児童が楽しめる工夫もしている。

■ 内装上の工夫：8、9年生の普通教室

前期(1~4年)と後期(8~9年)は、旧小学校校舎側に、中期(5~7年)は旧中学校校舎側に配置されている。再び旧小学校校舎側にもどる進級の過程において、少しでも環境的な変化を与えるために空いたスペースに「進路コーナー」を設けたり、「みやこ柚木」を使った机にするなど工夫されている。(②：後期学年の教室)



3. 地域とともにある学校施設の整備

■ 余裕教室を使用した保育施設と子育て支援活動センターの設置



東館の1階の旧中学校職員室・校長室を改装して利用し、家庭的な保育を行う「小野山わらんべ」（昼間里親施設）（③、④、⑤）が平成25年度より校内で運営されている。その様子を児童生徒が廊下から見るできるようになっているなど、児童生徒とのふれあいが自然に生まれるような工夫が見られる。

また、子育て支援活動センター「つどいの広場ぴーちくぱーちく」も余裕教室で運用されている。

施設一体型事例

4. 異学年交流スペースの充実

小規模校の特徴を活かし、児童生徒会の合同運営、文化祭、全校収穫祭、縦割り全員掃除、5年生と9年生の算数対決など多彩な異学年交流を積極的にすすめている。

■ グラウンド



1～4年生と5～9年生で授業単位時間はそれぞれ45分と50分と異なるが、昼休憩等の休み時間に異学年で時間が重なり交流が生まれるように校時に工夫がなされている。（⑥：合同運動会の様子）

■ ランチルーム



東館の1階に定員30名のランチルームを有する。「ふるさとルーム」（⑦）という名のこの部屋は、校内会議室、地域の会合、生徒の放課後や土曜の学習室としても活用している。

施設分離型事例

事例間比較

▶ 校長の視点から

大原学院 校長 石飛 聡

0～15歳の学舎を実現している本校は、保育所「小野山わらんべ」の存在が大きい。児童生徒が必ず通る廊下に面し、透明な大きな窓の奥には、元気な保育児童の姿が見られる。また、本館と東館をつなぐ渡り廊下（虹の架け橋と命名）や、西館入口には地域の写真や作品が展示してある。本校のキーワード「つながり」を、随所に見られる。

今後は、地域とよりつながる「地域図書館」や全員で給食が食べられる「ランチルーム」の設置を検討していきたい。

京都教育大学附属京都小中学校



国立大学法人 京都教育大学附属京都小中学校



高解像度を
お願い致します

東エリア正門前から見た校舎外観

背景

平成15年度に「9年制義務教育学校設立に向けた教育システムの開発」をテーマとして文部科学省研究開発指定校を受けたことから小中一貫教育への取組が始まり、平成22年に京都教育大学の附属小・中学校が統合され京都教育大学附属京都小中学校が誕生した。

小中一貫教育の実施に必要な施設整備は、既存校舎の活用を基本としながら段階的に進め、平成24年に小中一貫学校としての校舎整備が完了した。

学校概要

学校規模	[小]普通:18学級(546人) 特別支援:3学級(17人)
	[中]普通:9学級(315人) 特別支援:3学級(18人)
学年段階の区切り	4-3-2
開校年	平成22年(2010年)
構造	鉄筋コンクリート造
階数	地上3階
校地面積	40,916㎡
延床面積	8,346㎡

教育上の特色

キャリア教育を中核に据えて、小中9年間の教育課程を編成している。小学生には1年生から英語学習を教科として実施し、朝の時間帯に英語に慣れ親しむ場を設けている。高等部では「サイエンス・ランゲージ」という科学および言語分野での発展的な学習に取り組む。また、総合学習については、中等部に縦割り班活動、高等部にアントレプレナー(起業家精神涵養)教育を導入している。

学校運営(マネジメント体制)

1人の校長が小・中学校を兼務しており初等部、中高等部に副校長と教頭が各1名ずつの体制である。校長以外に乗り入れ授業を行う教諭が兼務発令されている。また、教務分掌と学校事務は統一されており、月に1回程度合同会議を設けている。

施設一体型事例

施設分離型事例

事例間比較

	学 年								
	1	2	3	4	5	6	7	8	9
学年段階の区切り	初等部			中等部			高等部		
授業方法	学級担任制				教科担任制				
運営方式	特別教室型								
授業時間	45分				50分				
校長	学校長								
副校長・教頭	副校長1人、教頭1人				副校長1人、教頭1人				
部活動	なし				部活動に一部参加		部活動		
PTA	PTA組織を一本化								
ゾーニング	西2~3階	西3階	東1階	東2階	東3階	東2階	東3階		
校長室	東エリア 1階								
職員室	西エリア 1階			東エリア 2階(教員室)					
保健室	西エリア 1階			東エリア 1階					
特別支援学級	西エリア 1階			東エリア 1~3階					
音楽室	西エリア 2階			東エリア 3階					
家庭科室	なし				東エリア 2階				
図書室	西エリア(総合館2階、多目的図書館)								
ランチルーム	西エリア 1階			東エリア 1階					
昇降口	西エリア本館1階			東エリア本館1階			東エリア北棟1階		
体育館	西エリア 体育館			東エリア 体育館					
グラウンド	西エリア グラウンド			東エリア グラウンド					
プール	西エリア								
給食室	西エリア1階(単独校方式)				なし				

計画・設計上のポイント

1. 異学年交流スペースの充実
2. 小中一貫教育の取組の高度化に資する共同利用
3. 小中一貫した教育課程に対応した施設環境

施設上の特色

【全体の構成】 校舎は隣接する東西の敷地に配置された多くの棟の集合により構成されている。安全で効率的な児童生徒の動線を確保するため、東西のエリアを結ぶ連絡通路を設置している。

【運営の一貫性確保】 普通教室は1～4年が西エリア本館、5～7年が東エリア本館、8～9年が東エリア北棟と4-3-2の学年段階に合わせて配置されている。特別支援学級は、1～4年は西エリア本館1階にまとめられているが、5～9年はそれぞれの学年の普通教室の並びに配置されている。

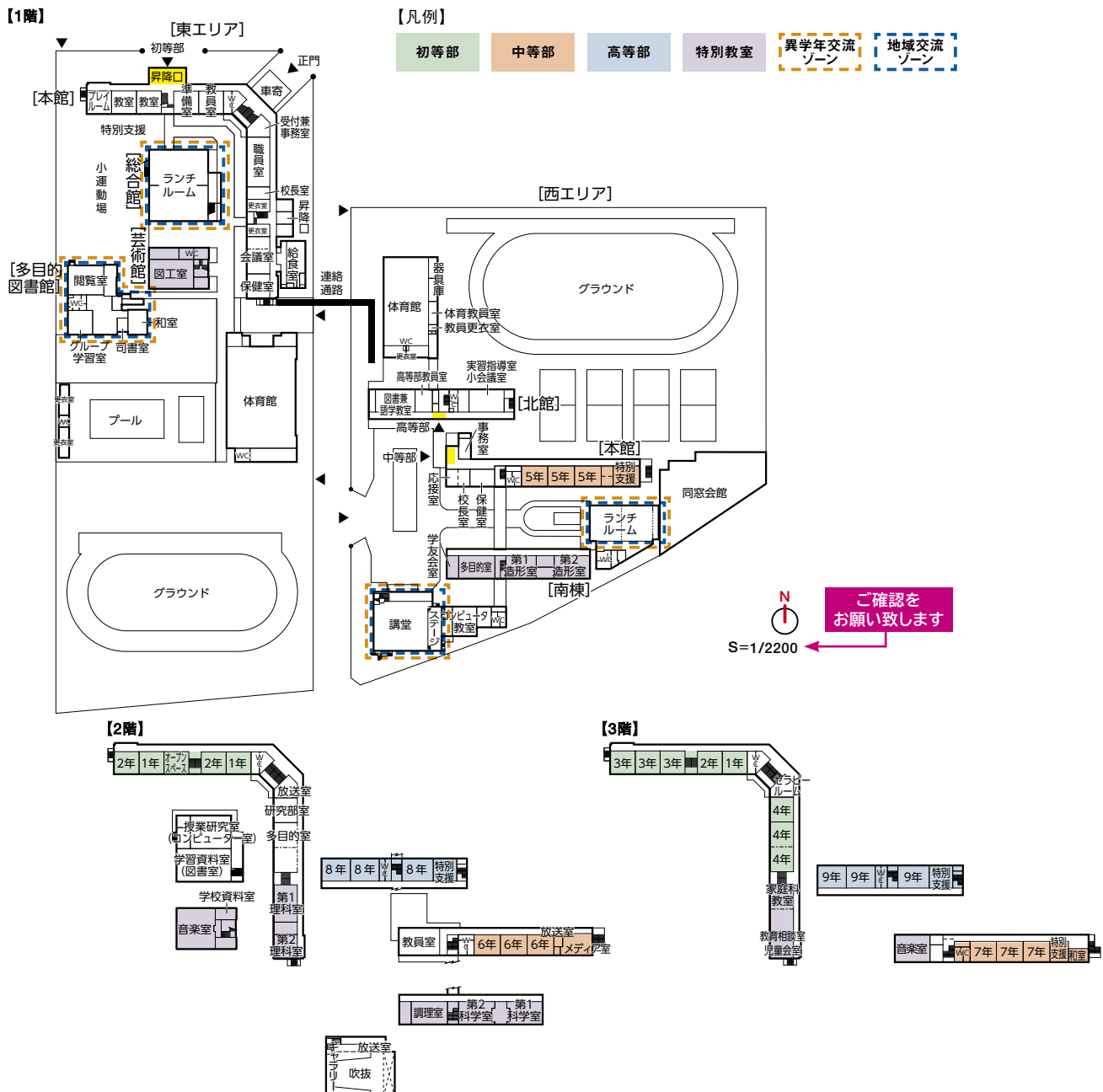
運動施設と図書館および式典、行事で利用する講堂は小中で共用しているが、特別教室は共有化せず、西エリア、東エリアにそれぞれ配置されている。

【小中一貫教育関連の整備の沿革】

- 平成17(2005)年 小学校東校舎を改修、中学校ランチルームを新築
- 平成20(2008)年 中学校校舎・体育館を改修
- 平成21(2009)年 5・6年生を中学校域校舎に移設
- 平成23(2011)年 連絡通路を新設、講堂、東エリア●○○
- 平成24(2012)年 特別支援学級5・6年生教室を東エリアに移設
(小中一貫学校としての校舎整備完成)
東エリアグラウンド改修
- 平成25(2013)年 西エリア大運動場、体育館を改修

校地		従来からの小中隣接敷地	
面積	グラウンド	18,054m ²	
		小 9,736m ²	中 8,318m ²
	校舎	13,692m ²	
		小 7,662m ²	中 6,030m ²
	体育館	1,807m ²	
		小 995m ²	中 812m ²

平面図・配置図



施設一体型事例

施設分離型事例

事例間比較

1. 異学年交流スペースの充実

中高等部向け多目的図書室



西エリアに設けられている中・高等部向けの多目的図書室(①、②)はネット環境や茶道体験のできる和室(③)を備えている。4年と8年の日本文化交流の授業(8年が習得した茶道・華道・日本舞踊・箏・和太鼓などを4年に教える)では西エリア多目的図書室・和室を活用している。



多目的ランチルーム



1～4年(初等部)は校内調理方式の配膳給食を西エリア教室または西エリアランチルーム(④)で、5～7年(中等部)は業者配送方式の一部配膳給食を東エリア教室で、8・9年(高等部)は希望者申込制の業者配送弁当方式の給食をランチルーム(⑤)でとることによりステージごとにまとめた方式と食事スペースを採用している。また、多目的ランチルームとして総合学習や文化祭にも活用している。

2. 小中一貫教育の取組の高度化に資する共同利用

特別教室



異学年縦割りで4名のグループを組んで調べ学習を行う5・6・7年の総合学習ではメディア室・多目的融合教室(⑥)・ランチルーム(⑦)等を使用する。また、1～9年の文化祭は、東・西両エリアの体育館・ランチルーム・講堂・多目的教室・造形室・家庭科室(⑧)を使用して行う。

講堂



東エリアにある講堂(⑨)は5年から9年までの600人が収容できるように改修されており、東エリアで共に過ごす中等部と高等部では行事や生徒会活動など共通の運営がなされている。また、小学1年生の入学式、9年生の卒業式など儀式的な行事も小中共同して使用している。

3. 小中一貫した教育課程に対応した施設環境

連絡通路

高解像度を
お願い致します



高解像度を
お願い致します



東西エリアを結ぶ連絡通路(10、11)は、両エリアの行き来に安全性が確保され、児童生徒や教員の交流を促進させた。

グラウンド

高解像度を
お願い致します



西エリア大運動場(12)では1~4年の体育授業、東エリアグラウンド(13)では、5~9年の体育授業を学年区分ごとに行っている。また、西エリア大運動場と東エリアグラウンドを使用し、全校生徒が参加するスポーツフェスティバルが行われるなど異学年合同の行事にも使われている。

クラブ活動においても、東エリアグラウンドでは、サッカー部、ソフトテニス部が、西エリア大運動場では陸上部が活動するなど小中のグラウンドの共有を図っている。

小運動場(14)には低学年を対象とした遊具が設置されている。

小中一貫校としての校舎整備完成までの歩み

本校での小中一貫教育への取組は、平成15年度に「9年制義務教育学校設立に向けた教育システムの開発」をテーマとして文部科学省研究開発指定校を受けた時に遡る。それ以来、既存校舎の活用を基本としながらも、改修・増築を繰り返し、平成24年特別支援学級5・6年生教室を東エリアに移設したことをもって小中一貫学校としての校舎整備が完成した。その後も運動施設の安全面への配慮や異学年交流推進のためにグラウンド、体育館等の改修を行ってきた。

(15: 高等部生徒が初等部児童に読み聞かせをしている様子)



高解像度を
お願い致します

施設
一体型
事例

施設
分離型
事例

事例
間比較

校長の視点から

おくだ なおき
京都教育大学附属京都小中学校 校長 岡田 直樹

本校の校舎は、校舎の耐震工事に併せ、4-3-2制の学年区分を尊重し、改修計画ならびに配置計画を立てた。小中のシステムの違いを配慮し、中等部(5・6・7年)の教授組織を小学校と中学校を融合させる段階と捉え考えた。また、リーダー体験とビギナー体験を繰り返し経験できる行事や取り組みを設けた。

このような考えを成し遂げるためには、『連絡通路』の建設なくしては語れない。そういう意味で本校のシンボルスペースは『連絡通路』といえる。

今後の展望としては、小中一体となった管理棟の新設である。小中の文化の違いや意識の違いをより解消するためには、場を一にすることが大切であるとする。

▶ 新築

府中学園

広島県 府中市立府中小学校・府中中学校



施設一体型事例



校舎外観

背景

府中市では、平成15年に市内全域で小中一貫教育を導入することを決定した。市街地中心部にあった工場跡地に4小学校を統合して、中学校校舎と一体的に整備を行い、平成20年に施設一体型の府中学園が開校した。

施設分離型事例

事例間比較

	学 年									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
運営状況	学年段階の区切り	小学部					中学部			
	授業方法	学級担任制					一部教科	教科担任制		
	運営方式	特別教室型					教科教室型			
	授業時間	45分					50分			
	校長	学校長1人								
	副校長・教頭	小学校教頭1人					中学校教頭1人			
	部活動	なし					部活動			
	PTA	PTA組織を一本化								
	ゾーニング	1階	2階				1階	2階		
	校長室	1階								
職員室	1階									
保健室	1階									
特別支援学級	1階					1階				
音楽室	なし	1階				1階				
家庭科室	なし					1階(調理室・被服室)				
図書室	2階									
ランチルーム	なし									
昇降口	1階					2階				
体育館	センターホール センターホール(各儀式・諸行事)・大ホール(地域開放)					大ホール				
グラウンド	南グラウンド・芝生広場・自然体験					北グラウンド				
プール	屋上									
給食室	1階(給食センター方式)					1階(給食センター方式)				
施設利用状況										

学校概要

学校規模	[小]普通:18学級(612人) 特別支援:2学級(14人) [中]普通:12学級(379人) 特別支援:2学級(3人)
学年段階の区切り	6-3
開校年	平成20年(2008年)
構造	鉄筋コンクリート造
階数	地上3階
校地面積	48,415㎡
延床面積	14,539㎡

教育上の特色

学習指導要領に基づく9年間を見通した計画的、継続的な教科指導や生徒指導等に取り組んでいる。

小学校授業への乗り入れや、学校行事を通じた異学年交流等を実施し、教職員は9年間を通して子供に関わることで、中1ギャップの解消を目指している。

学校運営(マネジメント体制)

1人の校長が小・中学校を兼務している。乗り入れ授業や道徳教育の推進を担当する教諭に対して兼務発令がされている。学校事務は共同実施している。

計画・設計上のポイント

1. 学年段階の区切りに対応した空間構成、施設設備
2. 小中一貫した教育課程に対応した施設環境
3. 異学年交流スペースの充実
4. 小中一貫教育の実施に適した安全性の確保

施設上の特色

【全体の構成】 校舎は6-3の学年段階に合わせて西側の中庭を取り囲む小学校ゾーン、東側の中庭を取り囲む中学校ゾーンとなっている。校舎と体育館は交差点を挟んで2階部分の渡り廊下でつながっている。

【教育活動の一貫性確保】 入学から卒業までの9年間で「旅」ととらえ、「繰り返し」「同じ空間」がないことをコンセプトとして設計されている。

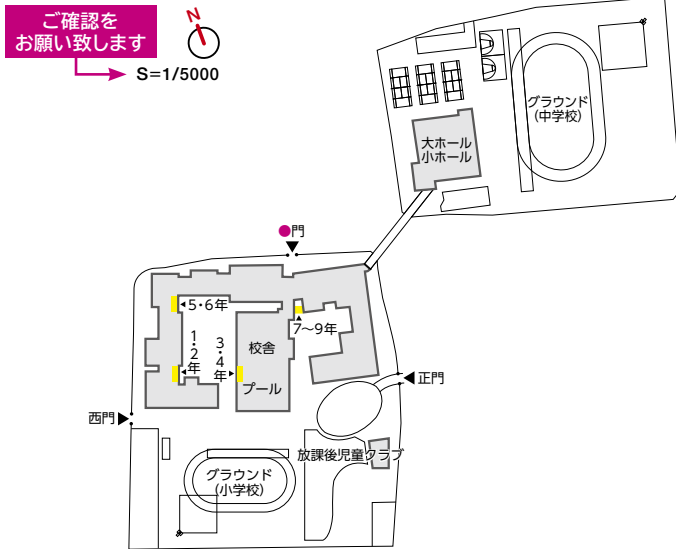
1、2年生は学級単位で学習と生活の環境を一体整備することで学校生活に慣れていくための空間づくりをしている。

3～6年生はオープンスペース型とし、オープンスペースに隣接して学年ごとの先生ルーム、交流ルームが設けられている。

7～9年生は教科ごとのメディアセンターと一体化した教科教室型で、関連教材や参考図書を設置し、自主的な学習に取り組むことができる環境を確保している。

中庭に挟まれた校舎中央部分には、共有スペースと職員室、保健室等の管理諸室がまとめられており、異学年交流の拠点となっている。

配置図

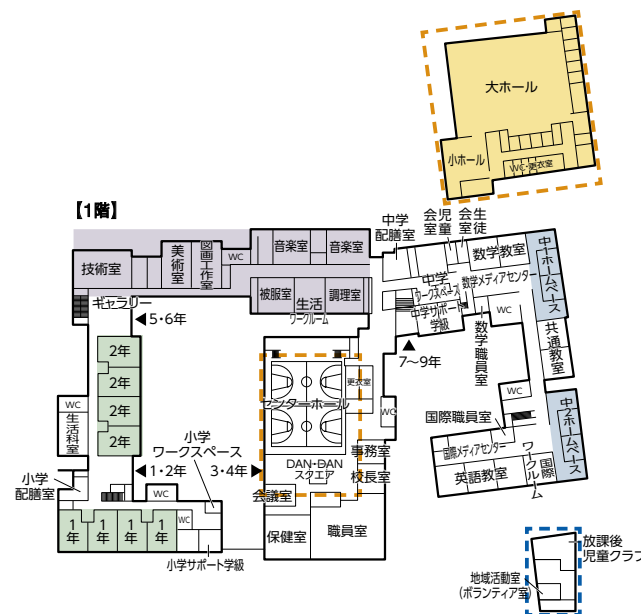


校地		従来からの中学校敷地 +新しい敷地			
面積	グラウンド	24,468m ²			
	校舎	小	11,349m ²	中	12,598m ²
		小	6,652m ²	中	5,333m ²
体育館	2,554m ²				
	小	1,036m ²	中	1,518m ²	

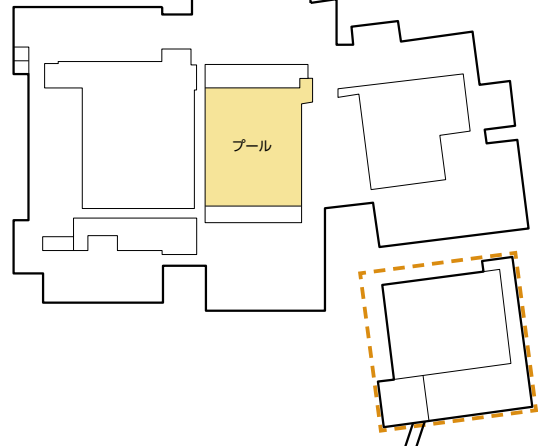
平面図

ご確認をお願い致します
S=1/2000

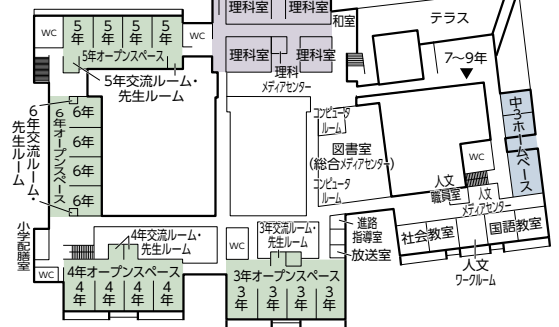
【凡例】



【屋上】



【2階】



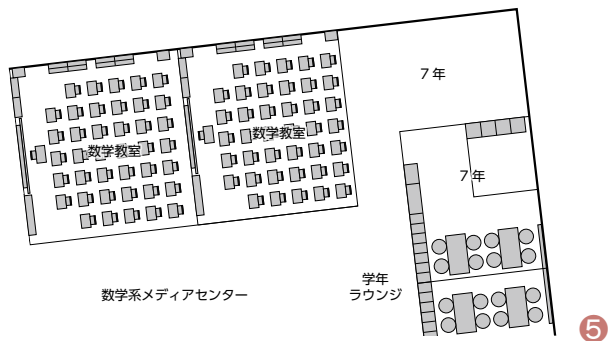
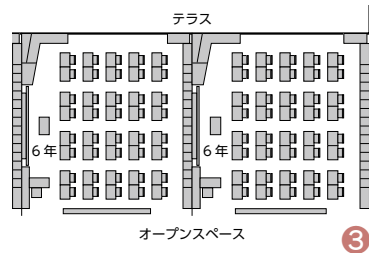
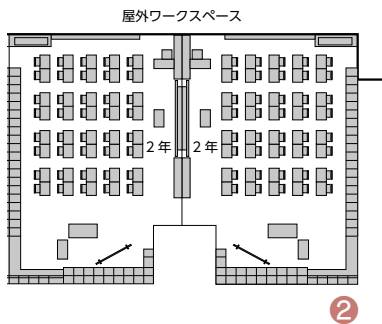
施設一体型事例

施設分離型事例

事例間比較

1. 学年段階の区切りに対応した空間構成、施設機能

教育課程の変化に応じた教室



9年間に充実して過ごせるよう、教室の大きさや、内装、家具、など教育課程や身体寸法の変化に応じた教室のつくりとなっている。
 (①、②:1~2年教室、③:3~6年教室、④、⑤:7~9年教室)

施設一体型事例

生活空間



昇降口



各学年ゾーンにあるトイレはそれぞれ違う仕様で作られ、フロアごとの位置も違う配置となっている。ベンチの設置(⑥、⑦)や、天井からの採光など変化に富んでいる。大きな荷物置き用カウンターを設置し、特別教室へ移動する児童生徒の利便性に配慮したトイレもある。

低・中・高学年、中学生がそれぞれの玄関を持ち、登下校時や緊急時に混み合わないような動線の工夫がなされている。
 (⑧:小学1・2年の昇降口)

施設分離型事例

事例間比較

中庭



校舎は中庭(⑨)を囲むように配置されており、各学年ごとに教室の向きやスタイルが変わる。子供たちは進級するたびに变化する窓外の景色とともに「9年間の旅」をする。

2. 小中一貫した教育課程に対応した施設環境

図書館



図書館は総合メディアセンターとしてコンピュータールームと一体化されている。(10)

新しく入った本の紹介や、読書週間等のおすすめ本のコーナーを小・中学生向けそれぞれに設置している。(11)

3. 異学年交流スペースの充実

多目的スペース「DANDANスクエア」



高解像度を
お願い致します

共用棟の中心部、1・2階吹き抜けに設置された「DANDANスクエア」(12、13)は、階段状の空間とフロアがあり、多目的に活用している。学期毎に行う「DANDANライブ」という小中合同のミニコンサートや、中学生から小学生へのプレゼンテーションなどのイベント開催、児童生徒の作品展示、委員会からのお知らせ掲示など小中学生の交流・往來のほか、憩いの場としても利用されている。

4. 小中一貫教育の実施に適した安全性の確保

連絡通路



校舎と体育館を連結する連絡通路(14)を設置し、道路横断時の事故を未然に防いでいる。連絡通路は中学生用グラウンドへの移動にも利用する。

校長の視点から

いけだ てつや
府中学園 校長 池田 哲哉

本校は、愛称を府中学園といい、開校7年目を迎え、小中一体型と言う、特徴のある校舎を最大限に活用し、9年間を見据えた教育活動を進めています。そして、小学校の中・高学年は、オープンスペース型の教室で過ごし、中学生になると、教科毎に教室を移動する、教科教室型となっています。このように学年が上がるにつれて風景が変わり、9年間の旅を意識した校舎の造りとなっています。今後は、さらに施設等を有効に活用し、充実した教育活動が展開できるよう取組んでいきたいと考えています。

▶ 新築

奈留小中学校

長崎県 五島市立奈留小学校・奈留中学校



校舎外観

背景

奈留小中学校は、奈留島唯一の小中学校である。奈留島は長崎県五島市で人口は2番目に多いが、少子高齢化が進み、この地区では平成10年以降、2校が奈留小学校と統合した。同年文部科学省委嘱中高一貫教育推進校となり、平成20年度から小中高一貫教育が本格実施されている。教職員及び生徒の移動を考慮し、県立奈留高等学校校舎と渡り廊下で接続されている。平成22年に老朽校舎の改築を契機に奈留小学校が中学校敷地へ移転し、施設一体型校舎が整備された。

学校概要

学校規模	[小]普通:4学級(45人) 特別支援:1学級(1人) [中]普通:3学級(40人) 特別支援:0学級(0人)
学年段階の区切り	4-3-2
開校年	平成20年(2008年)
構造	鉄筋コンクリート造
階数	地上2階
校地面積	40,695㎡
延床面積	5,120㎡

教育上の特色

「自ら学び 自ら生き方を切り拓き 夢を実現する児童生徒の育成」を学校教育目標とし、小中高一貫教育で「学力の向上」「社会力の育成」を図っている。特に小中で英語力の向上に力を入れており、小学1年生から「英語活動」の授業を行っている。全学年の活動・授業に高校のALTが参加し、5、6年生には中学校の英語教員が乗り入れ授業を行っている。英語以外でも、中学校の国語、体育に高校教員が、小学校の音楽に中学校教員が乗り入れ授業を行っている。

学校運営(マネジメント体制)

小学校長が、中学校長を兼務している。乗り入れ授業を行う教諭、養護教諭など一部の教諭が兼務発令されている。生徒指導等の校務分掌は小中教職員が合同で担当している。小中高の教職員同士で、週一回情報共有のために会議を開催している。

施設一体型事例

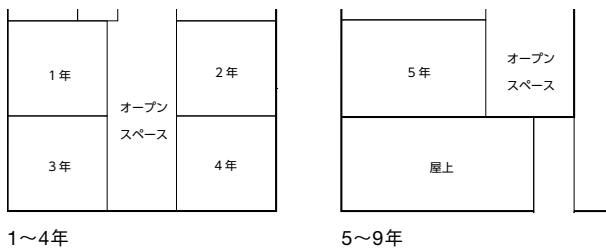
施設分離型事例

事例間比較

	学 年								
	1	2	3	4	5	6	7	8	9
学年段階の区切り	前期			中期			後期		
授業方法	学級担任制				教科担任制				
運営方式	特別教室型								
授業時間	45分				50分				
校長	小学校長が中学校長を兼任								
副校長・教頭	小学校教頭1人				中学校教頭1人				
部活動	なし				部活動				
PTA	小学校PTA				中学校PTA				
ゾーニング	1階			2階					
校長室	1階								
職員室	1階(学年段階の区切りごとの座席配置)								
保健室	1階								
特別支援学級	1階(可動間仕切)								
音楽室	2階								
家庭科室	なし			1階					
図書室	1階								
ランチルーム	なし								
昇降口	1階			1・2階					
体育館	アリーナ1階				柔道場1階				
グラウンド	グラウンド								
プール	なし(町のプールを利用)								
給食室	1階(給食センター方式)								

1. 学年段階の区切りに対応した空間構成、施設機能

普通教室と隣接するオープンスペース



普通教室は4年生までは36m²、5年生から中学生は54m²となっており、家具の大型化などに配慮がなされている。また、中学生の普通教室に隣接した広めの廊下にあるオープンスペース(①、②)には共用の図書館から一部の図書が分散配置されており、生徒の日常的な読書活動の要請に応じている。また、普通教室脇のオープンスペースでは、前期(小1～4年)や中期(小学5・6年と中学1年)の集会在、頻繁に行われている。

屋外オープンスペース



校舎2階部分にある屋外のオープンスペースは屋根付きのウッドデッキ(③)が設けられており、観察・実験など理科の授業活動等に活用している。

2. 小中一貫教育の取組の高度化に資する共同利用

音楽室



特別教室に関しては、小中各々の必要室を整理し、共有や他室との兼用の可能性を検討し、最小限となるように整備されている。音楽教室や家庭教室を小中で共有利用しており、図工室と美術室を兼用している。
(④:外観にも特徴を持たせる円形の音楽室)

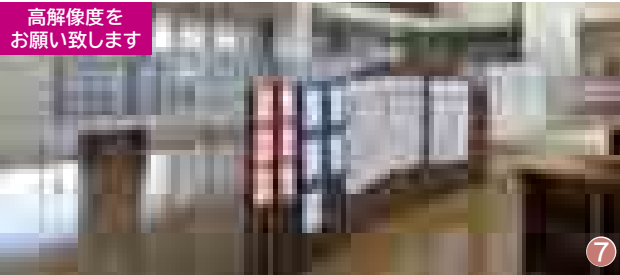
美術室



図工室にも兼用している美術室。(⑤)

3. 異学年交流スペースの充実

ふれあいホール



「ふれあいホール」という多目的スペースでは、小学5年～中学1年(中期)の英語発表会が定期的開催されている。その他には、図書ボランティアの読み聞かせ(6)や小学生の造形遊び、夏休みの作品展や書き初め展(7)など児童生徒の作品掲示などにも活用している。また、ソファやその周辺は児童生徒たちの交流や憩いの場となっている。

中庭の屋外ステージ



エントランスホールから続く屋外ステージ(8)では、小中合同で行われる音楽祭の練習などを行い、生徒の表現力の育成に活用している。

施設一体型事例

施設分離型事例

事例間比較

4. 小中一貫した教育課程に対応した施設環境

小中高一貫教育の推進



平成20年より小中高一貫教育を本格実施しており、隣接する県立奈留高校と共に小中高一貫教育の在り方に関する実践研究を推進している。

小中高での合同行事として、毎年4月は歓迎遠足、9月は体育大会、10月はかるた・百人一首大会を実施している。また、英語・数学・音楽等の相互乗り入れ授業の実践のほか、卒業間近の高校三年生が小学生に勉強を教える機会や、「奈留・実践」という地域における体験活動等への参加を通して、問題解決能力や社会性の向上を目指す合同の取り組みなど、さまざまな交流・連携を図っている。(9:野外活動、10:かるた・百人一首大会、11:体育大会)

校長の視点から

ながお のりひろ
奈留小中学校 校長 長尾 能博

日本の西の果て五島列島の中央部に位置する奈留島は、漁業で栄えた潤いの島でした。また、一島一町である奈留町は古くから「教育の町」としても有名です。現在も学校教育に対する信頼と期待は大きく、学校と地域が一体となって子供たちを育てようとする教育風土が根付いています。島の中心に位置する小高い丘の上に建てられた校舎は島自慢のシンボルであり、また、遠くふるさとを思う卒業生へ希望と勇気の光を届ける灯台のようでもあります。この校舎で学んだ子供たちは迷わずいつでもふるさとへ戻る事ができるでしょう。